

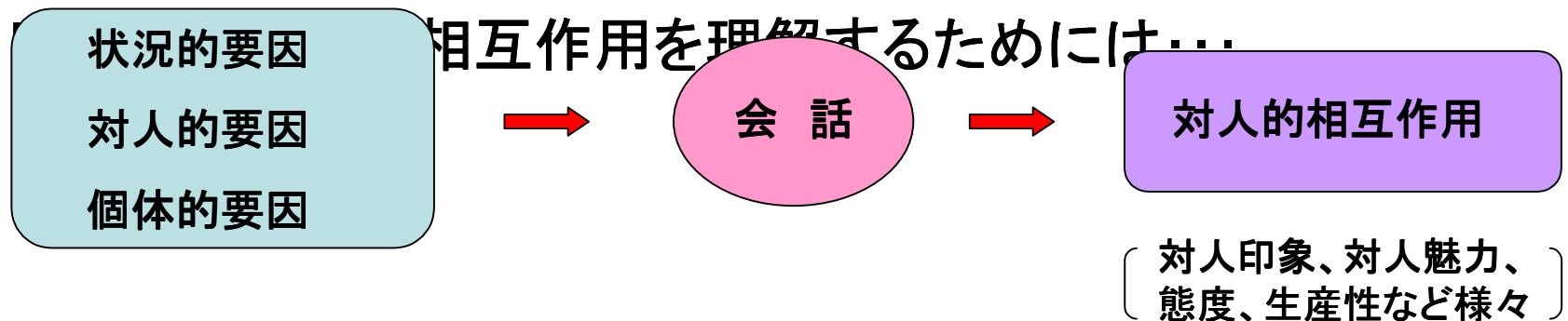
二者の発話量の均衡状態と印象の関係  
— 社会心理学的アプローチ —

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

小川 一 美

# 対人コミュニケーションを 社会心理学的に検討する意義

対人関係の諸相を検討する研究テーマのひとつである



2段階の影響過程を明らかにする必要がある

(西田・浦・桑原・榎野, 1988)

## 状況的要因、对人的要因を考慮する必要性

### <状況的要因>

例：**場面要因**による影響 (Ryan & Carranza, 1975)

→話者に対する地位や親しみ評定において、場面(家庭での会話場面vs授業場面)によって異なる効果が示された

### <对人的要因>

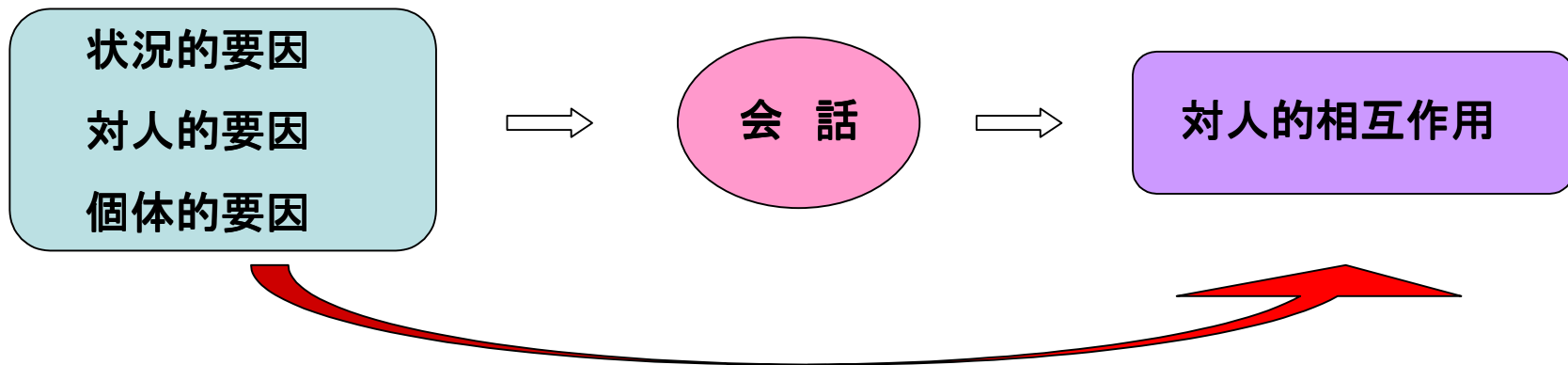
例：**会話者間の関係**による影響

→会話における同調傾向は会話者間の関係の特質によって影響される(大坊, 1998)

→ノンバーバルコミュニケーションがどのように行われ、そして解釈されるかは、会話者の関係(共同作業員vs友人vs配偶者)や関係の段階(知り合ってどれくらいか)によって異なる  
(Hecht et al., 1999)

## 従来の社会心理学的研究の問題点

- 何らかの先行要因と対人印象、対人魅力、態度、生産性などを直接結びつけようとするものが多かった(西田ら, 1988)



- 会話文を提示することで場面を想定させるなど、実際の会話行動そのものを扱っていない

# 発話スタイルに関する研究

発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果  
— 決めつけ型発話と会話場面の観点から —  
(小川・吉田, 1998)

## 決めつけ型 (opinionated) 発話

特定の信念に対する送り手の態度だけでなく、その意見に賛成または反対する人に対する態度も伝達する

(例: 「映画をあまり見ないなんて人は人生の大きな楽しみを一つ知らないよね」)

## 非決めつけ型発話

単に特定の信念に対する送り手の態度だけを伝達する

(例: 「映画はたくさん見た方がいいよね」)

## <会話場面について>

他者のパーソナリティについての認知は、行動の背景となる状況に影響される(廣岡, 1990)



消費的会話場面・・・会話目的が明確でない会話場面  
(例: 2人で見た映画について)

問題解決的会話場面・・・明確な目的のある会話場面  
(例: クラブ旅行の計画について)

## <手続き>

作成された会話シナリオにもとづいて録音された会話(消費的会話場面と問題解決的会話場面をそれぞれ一つずつ)を、**音声のみ提示**し、被験者に**印象評定**させた。

発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果(2)  
— 叙述的発話と断片的発話の比較 —  
(小川・吉田, 1999)

<方法>

手続き: 模擬面接場面で被験者は面接者の役を演じた  
(被面接者は実験協力者であり, 叙述的発話もしくは断片的  
発話を用いて質問に答えた)



被面接者(実験協力者)に対する印象評定

叙述的(narrative)発話・・・

質問に対して自発的に長く述べる発話

断片的(fragmented)発話・・・

質問に対して依存的にかつ短く述べる発話

## 2人の会話者による相互作用に着目する必要性

### 同調現象・・・

対人関係の影響を受けて、時間経過に伴って、コミュニケーションパターンが相手の示すパターンに近似していく

(Matarazzo et al., 1963; 1972など)

### 相互作用パターン (Burgoon et al., 1995)

返報性 (reciprocity)・・・相手のコミュニケーションに対して

同じまたは類似した行動で反応する

相補性 (complementarity)・・・

互いの行動が異なっているが相補的である状態



会話は二者によってダイナミックに作りあげられる相互作用である



# 発話量の均衡状態の効果に関する研究 (小川, 2000など)

## <目的>

### 初対面時の会話場面における発話量の均衡状態と 印象の関連を検討する

- ←友人関係の形成などを考えても、初期の会話場面における相手に対する印象などは重要であろう
- ←発話量の均衡状態は二者によって作り出されるもの
- ←関係の初期段階にある二者にとっては、返報性の期待から均衡状態が重要になるであろう

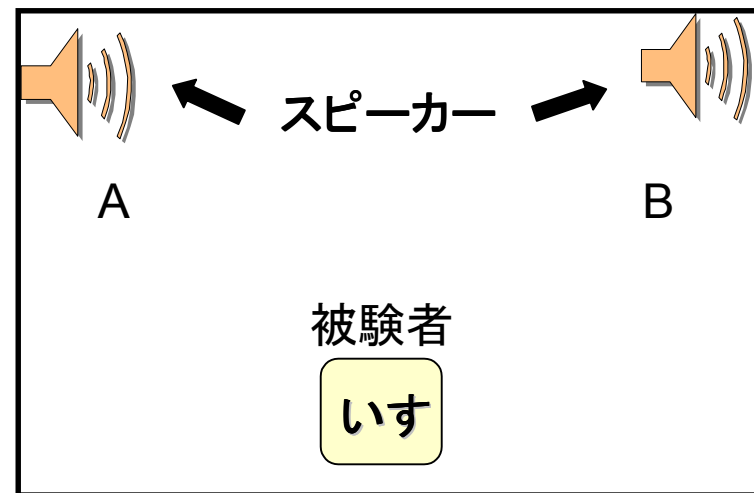
## <研究1: 会話者による印象評定>

- 「応答頻度」「沈黙頻度」は、相手に対する「好ましさ」と関係あり
  - 自分の方が多く相づちを打ったり、黙って相手の話を聞いていた場合は、相手の会話者に対して好ましい印象を抱く
- 「開示頻度の均衡」「質問時間の均衡」は、相手に対する「好ましさ」と関係あり
  - お互いが同程度の開示を行ったり、同じくらい質問をしよう会話では、相手の会話者に対して好印象を抱く
- 「開示頻度の均衡」は会話に対する「快」印象と関係あり
  - 二者間の開示量のつりあいがとれている場合に、その会話に対して快印象を抱く

## <研究2: 観察者による印象評定>

### 実験1

- 初対面のペアによる**自然会話場面**を刺激とし、音声のみを被験者(観察者)に提示した  
(刺激は9会話あり、そのうちの1つがランダムに提示された)
- 会話者、被験者(45名)は、いずれも女性であった
- 10分間の会話を聞いた後、  
質問紙へ回答した



## 実験1の分析結果

- 各発話を「開示」「情報」「質問」「応答」「沈黙」に分類し、各頻度および時間を測定し、二者の相対的な発話量を算出した
- 各カテゴリーに属する発話量に基づき、各会話者を「発話量多群」「均衡群」「発話量少群」の3群に分類し、対人印象に対して分散分析を行った

Table 3 実際の発話量における均衡状態群ごとの会話者に対する印象得点

	開示時間			情報時間			応答頻度、応答時間、沈黙頻度			沈黙時間		
	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N
<b>&lt;社会的望ましさ&gt;</b>												
発話量少群	4.64	(.72)	20	5.19 <sup>a</sup>	(.69)	20	4.44	(1.01)	20	4.45	(.83)	20
均衡群	4.71	(.91)	50	4.59 <sup>b</sup>	(.84)	50	4.69	(.83)	50	4.71	(.91)	50
発話量多群	4.45	(.83)	20	4.19 <sup>b</sup>	(.74)	20	4.70	(.73)	20	4.64	(.72)	20
<b>F値</b>	0.64			8.18 <sup>**</sup>			0.68			0.64		
<b>&lt;活動性&gt;</b>												
発話量少群	3.69 <sup>a</sup>	(1.00)	20	3.90 <sup>a</sup>	(.74)	20	5.02 <sup>a</sup>	(.88)	20	4.99 <sup>a</sup>	(.86)	20
均衡群	4.34 <sup>b</sup>	(.92)	50	4.29 <sup>a</sup>	(1.11)	50	4.31 <sup>b</sup>	(.93)	50	4.34 <sup>b</sup>	(.92)	50
発話量多群	4.99 <sup>c</sup>	(.86)	20	4.92 <sup>b</sup>	(.72)	20	3.73 <sup>c</sup>	(.97)	20	3.69 <sup>c</sup>	(1.00)	20
<b>F値</b>	9.91 <sup>**</sup>			5.84 <sup>**</sup>			9.84 <sup>**</sup>			9.91 <sup>**</sup>		

<sup>\*\*</sup>  $p < .01$ , <sup>\*</sup>  $p < .05$ , <sup>†</sup>  $p < .10$

注1: 異なるアルファベットが付記されている数値は、その間に有意差があることを示している

注2: 応答頻度、応答時間、沈黙頻度は9回話が同様に3群に分かれたため、群ごとの印象得点は同じであった

## <社会的望ましさ>

- 「情報時間」において群による差  
→初対面では、相手より多く「情報」を提示することは、望ましいことではないと観察者には認知される

## <活動性>

- 「開示時間」「情報時間」「応答頻度、応答時間、沈黙頻度」「沈黙時間」において群による差  
→相手より多く「開示」や「情報」を提示することは、活動性が高く評価され、一方、「応答」「沈黙」量が相手よりも多いと活動性が低く評価される

## <会話に対する印象>

- 「応答頻度」「応答時間」「沈黙頻度」「沈黙時間」との間で負の相関  
→両者の応答量が同じくらいであったり、黙って相手の話を聞いている量が同じくらいである会話に対して、観察者は快印象を抱く

## 実験2

- 要因を可能な限り統制し作成した会話を刺激として用い、  
音声のみを提示した
- 会話者、被験者(105名)は、  
いずれも女性
- 予備実験から、会話者2名の  
音声的特徴などの違いによる  
印象評定への影響はあるとは  
言えないことが確認されている

	開示量	応答量
会話 1	A=B	A=B
会話 2	A>B	A=B
会話 3	A=B	A>B
会話 4	A>B	A>B
会話 5	A>B	A<B

## 実験2の分析結果

平均値を見ると、両者の「開示」「応答」量の均衡がとれている会話の印象が最も良かった

Table 4 会話刺激ごとの印象得点  $N=105$

	開示量	応答量	A望ましさ	A活動性	会話(快)
会話 1	A=B	A=B	3.78 a (.92)	4.29 a (.79)	4.27 (.96)
会話 2	A>B	A=B	4.58 b (.88)	4.27 a (.94)	4.00 (.70)
会話 3	A=B	A>B	4.43 (.87)	4.54 (.83)	3.92 (.61)
会話 4	A>B	A>B	3.95 (1.09)	5.04 b (.70)	4.06 (.97)
会話 5	A>B	A<B	4.23 (.58)	4.41 (.61)	4.06 (.60)
$F$ 値			2.98 *	3.50 *	.57

\*  $p < .05$

「開示」「応答」量共に相手と同程度よりは、「応答」量は相手と同程度であるが「開示」を相手よりも多く行う会話は望ましい

会話1, 2よりも、4のように「開示」「応答」共に相手よりも多い会話は活動的であると認知される

## 研究1, 研究2から示された課題

- 会話者であるのか観察者であるのかという**認知者の立場の違い**によって、発話量が及ぼす効果は異なってくる
- 単一のカテゴリーに属する発話のみに着目するのではなく、異なる形態の発話量の組み合わせに着目する必要がある
  - 発話量以外の指標にも当てはまることで、会話というダイナミックな相互作用事態を少しでもリアルに捉えるためには、**複数の要因の組み合わせがもたらす効果**を検討していく必要がある



## 今後の課題

- 単独音声に関する研究成果や基礎的データとの関連
- 研究目的に則した実験状況の設定



「コミュニケーション」を多角的に検討していくためにも、多様な領域の研究者がそれぞれのテーマで研究を重ね、相互に補い合いながらそれぞれの目的を達成していくことが期待される